

中心市街地衰退の原因と活性化の現状

～宇都宮市を例にした市民が持つべき未来の都市像の提案～

宇都宮市のこれからを考えることは、なぜ必要なのか。これからの都市というのはこのままでいいのだろうか。

20世紀の日本の都市は、成長・拡大を続け、膨張し続けてきた。自動車の普及により、今までのコンパクトで凝縮された日本本来の暮らしというものがどんどん拡散され、都市は膨張を続けていった。戦後、破壊し尽くされた数々の都市を立て直さなければならなかったため、全国各地で画一的な都市計画が進められ、都市の存在価値や目標は、とにかく、復興・経済成長が主とされていた。

そのような中で無視され続けてきたのが、地域それぞれの個性であったり、その地域が内包する歴史的価値であったり、戦前の特徴的な町並みであったりした。そのため、日本全国は、例外もあるが、同じような都市であふれ、どこに言っても同じような価値しかなくなってしまった。その中で生活している日本人は、その地域に住む誇りや意味さえ見出せなくなってしまった。それに加え、自動車の普及が急速に伸び始め、狭くて自動車が使いにくい中心部にいるより、広くて自動車も乗りまわせる郊外に移っていこうといった傾向が強まっていった。そのような時代の動きに取り残されてしまったのが、中心市街地であり、今の宇都宮市につながる姿なのである。

宇都宮市の中心市街地というものは、「小江戸」と呼ばれるほど栄えていた。その歴史的価値というものは高く、その地域に住んでいることに誇りすら持てる地域であっただろう。今その風景が残されていれば、世界遺産である日光東照宮と並ぶ歴史を内包する場所であっただろう。しかし、経済活動や道路交通を優先させた結果、そういった価値として残る建造物や町並みなどは、影も形もなくなってしまった。

なくしてしまったものに価値を見出すこと、それをどう現在の宇都宮市のまちづくりに生かしていくか。それは、そこに住む人々の想像力を働かせ、歴史を大切にし、継承させていこうという動きに他ならない。中心市街地に対する取り組みとして、宇都宮市、商工会議所、第3セクターである宇都宮まちづくり推進機構の取り組みを挙げた。第3セクターの役割といったものは大きく、やはり、公共と民間の協働として設立させたこともあって、公共に比べてみると、その事業展開や、主として活動している人々の動きは軽快である。

中心市街地に対する活性化事業には、多くの人に関わり、取り組まれている。その事業の対象となっている中心市街地や中心商店街の人々自体は、どのような動きを見せているのであろうか。

中心商店街が注目されているわけは、その地域の発展に多くの尽力を注ぎ、生活の場としてそこに社会を形成させてきたからである。しかし、現状は、郊外店の進出の波にのみ

れ、売上げは低下、それに伴って、そこを生活の場とする人の減少、少子化、高齢化、ハード・ソフト両面の衰退など問題が山積みとなっている。それに対して、その場所を生活圏とする人でさえ、無関心であり、中心商店街の誇りと価値を取り戻そうと努力している人の口からでさえも、その人々の関心を取り戻すのは難しいといった声が聞こえてきてしまう。

その声から見えてくる、今後の宇都宮市中心市街地、ひいては宇都宮市のまちづくりに必要なことは、内部の意思統一であり、自分たちが住んで、生活の場にしている地域に対する責任感と関心である。

なぜ、何年も中心市街地活性化事業など取り組まれてきているのに、成果があがらないのか。その原因として、市民の関心のなさというものも挙げられるが、この問題をそのせいだけにして、議論を終わらせてはいけない。ここで、考えられるのは、日本人の都市計画のあり方、都市に対する意識というものが挙げられる。成功してきた商店街や都市の人々は、自分の手でそれらの問題を整理し、昇華させ、自分たちの都市像というものを持てるようになっている。

自分たちの都市、町のあるべき姿、残すべき都市の姿さえはっきり認識できれば、今住んでいる地域を考え、自分たちの手で変えていくことは可能であると考え。今まで、地域活性化、まちづくりとしての商店街活性化などがなかなか進まなかった理由は、そのビジョンがあいまいにされ、何が目的かといったことをはっきり認識させなかったからではないかと考える。

宇都宮市の「都市像」をどう考えればいいのか。欧州などで提唱され、日本でも近年考え方として認識されるようになった、「コンパクトシティ」を基本概念としてあげたい。基本的な考え方である、「密度を高めて徒歩圏内で日常サービスを受けられ、公共交通が成立しやすいように、地域を再編成すること」は、中心市街地活性化に向け取り組まれている課題に沿っているようだ。その考え方の行き着く先は、「コンパクトシティによって自動車依存社会を克服する」ことである。交通のニーズに柔軟に対応できる都市、「要求対応型交通(DRT)」が今後目指していくべき望ましい形である。

その結果、自動車に依存しなくても良い生活圏が形成され、より人間的で、コンパクトな生活圏といったものが形成されるはずだ。

歴史的背景を振り返る作業も、日本人らしい生活、宇都宮市の市民としての生活とはなんであったかということを出し、自分たちがなぜここに存在し、町というものを形成してきたかということを出すために必要なことだ。町を膨張させ続け、自分勝手に破壊を繰り返してきた今までの時代を反省し、新たな時代への転換期に立つ心構えとして、自分たちが目指すべき都市の姿というものを市民一人一人が認識しなければならない時代がやってきたといえる。そのような市民が住み、形成していく都市は、未来に存続させるべき都市へと成長していくのである。